



環境教育科学序論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田所, 哲太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000385

特別寄稿

環境教育科学序論

田所哲太郎

目次

1. 緒言	第五節 家族内で男女両性の教育
2. 抵抗の教育学の弁	第六節 自然環境光線温度乾湿への教育
第一節 従来の教育学と環境	第七節 家庭生活と時代精神との環境
第二節 環境の類別と教育科学	第八節 個人心身上の葛藤を日本に見る
第三節 肉体的又心理上の素質変容は胎教に始る	第九節 個人心身の葛藤への抵抗と鍛錬
第四節 社会集団でコアセルウエート教育	

緒言

環境教育学が山下俊郎氏によつて書かれてその一部は姿を顕わしたが完きものではない。更に著者は教育科学なる表現を用いて自然科学をやつたものの立場から見て環境教育学を補つてみたいと考えた。由来自然科学の中で生物学をやつた者がよく物理現象のきつかけをつかむ。その質的發展は生物学的に行われ、量的進展は物理学者で行われている。彼の**カルヴァニー**が電流なる物理現象のきつかけを捕え**ボルタ**以後の物理学者で量的進展を見ている。又**ブラウン**運動の発見も植物学者で之に素晴らしい量的發展を与えたのが**アインシュタイン**であつた。近代化学に貢献した**クロマトグラフィー**の**ノーベル**賞に至る迄に初めのきつかけを作つたのが植物学者**トスウェット**であつて、葉緑素と**カロチノイド**との分離に初まつたのであつた。それで生物化学をやり人間生命現象を研究せんとしている著者には、人間の本質的なものに異つた側からふれ得て教育学にも多少の貢献をもたらす動機とならば幸であると考えたのである。

教育は生きることによつて始まるが、生命と環境とを包含しているのが生物であろう。発生によつて一度生命を創造するや、部分に対して全体の支配力を有するに至るのである。生命現象には統一があつて、領域内の本質は物理的にも化学的にも属せぬ生命發展のための調和的又合目的の生物独自の法則によるものである。だから無生物に見られぬ原理が内在しており機械の集合したものとは異なる。例えば人間の生存には空気中の酸素と炭酸瓦斯の分圧が一定でなくてはならぬ。又分圧変動で血液中の赤色素**ヘモグロビン**含量を変化させそれにより生活をつづけて行くが、分圧変化が大き過ぎて応じきれぬ場合は生命を失うことになる。かくて生物と環境とを一つにまとめた処に生命の立場があり、それにより生物の行動も自から制限される。即ち行動は環境に対して全体として行う一つの反応系であり、その生命力並びに遺伝子を伝え生活活動をする。それだから生命のつづく限り日々の行動は環境に対して反応するが、それには教育が必要である。生命を失うような酸素と炭酸瓦斯の分圧の変化が大きすぎない環境を選ぶことも教育である。生命現象から発見する社会問題（自然淘汰）も沢山あるが、生物学界で行われる**オーバーリン**の云う混合物は新しい化合物のような化学的性質をもつものである。社会人とは個人生命の集りではあるが、個人生命には物理や化学

の個々の現象以外に調和性や合目的性があるように、社会人としての個人生命の集りにも特殊な法則があるものである。それだから個人には認められぬ原理も内在して、所謂**デューウィー**の云うように「吾々は直接に教育することは不可能である。教育は間接に環境によつて出来るのである」ということにもなるのである。即ち社会人とならば個人と環境とを包含している。そして個人に対して集団社会が支配力を有することによつて社会国家が創造されている。だから人間はこの環境に対してはたらきかけ、生命と環境とを包含している。その環境の一つ一つの変化多様性に応じ切れぬ場合は生命は保たれぬ。その如くに社会人として国家人としてその行動は制限されるが、それを子孫に伝えて国家人の生命力とするのが教育であろう。多種多様に各個人がそれぞれ顔の異なるように心にも身体にも微細な差異をもつた混合体のみが社会人の生命力である。即ちある人の失われたものが他の人の生存に寄与する。オパーリンの生命とは統一され調和されたものであるとするのと同一である。この観点から教育科学を書いて諸賢の矯正を乞うのである。

抵抗の教育学の辯

人間探究は文学の本質であり、「いかに生きるか」の問題が伏在しての探究に外ならぬとされる。芭蕉の俳諧の如きは人間の姿を呈示するには比較的あらわでないとしても、凡ての文学は人間性の不当に圧迫され触害されている時の抗議の声がその自然の勢で放たれている。身分や権力や金力や運命による強い圧力、それが正当な人間的主張を押しつぶそうとする時に示される抵抗もそれである。また多数をたのんでの卑俗なもの押しつけもあろう、圧迫は常に社会の上層にある者からくると限らず、下層の者からもくる。人間本質ありのままの姿を鏡にかけて写し取つてゆく無遠慮さほど抵抗として強力なものがあろうか。そしてそれは徐々に人の心にしみわたり、その反省を通じて自からにその反人間的なものを溶してゆかさせることにより人間性を護るのである。

教育は生活持続のためのものであり、肉体・精神・生命力の訓育であるから、人間の高級な行動を生むためになされる事である。最も高級な行動とは、人間が現実の環境に対して行動的に適応する場合の意志や注意などの心的持続でもある。即ち精神力を持ち、力と緊張とを備え、意志的で勇敢で明晰な行動を為し得ることは、単に**エネルギー**を総合して動向を統一し行動に実現するのみでなく、反対するあらゆる衝動を抑圧し自己の行動をよく制御する。それはかの野獣が柵の中に飼われた環境で起る内外の葛藤に対して抵抗し、又適応せんとする行動と同様であろう。

生命力の強化とは生活環境の矛盾対立に立つて適応力を盛上らせるものでなくてはならぬが、その訓育が教育であるとする。何故ならば人の性質をなす身体的要素と共に感情・希望・思想と心的要素をも包越したものの現実への行動として適応力の涵養が教育だからである。だから行儀も作法も動作も態度も、社会的にも学校にあつても友人に対しても気候にも家庭にも総てよく索制し制御し適応する力を養う事である。人生のあらゆる出来事、それは生死であれ悲喜であれ禍福であれよく統御する力が生命力の強靱さによるものである。社会の法律、経済、習慣に複雑な変化がある度毎に新しい抵抗を感じその状態に順応する努力により成功する。そして自己の内部的葛藤も解消し平和的解決が与えられ、外部的葛藤も事情を破損せずして解消され易々として行動されるようになるのが教育効果でもあろう。だから大きい抵抗を感じ苦悩を解決した文学はより偉大なものであり、かく教育された人物は巨人格を育成したのであつたと云える。かの皇室の人々貴族の生活に愛と死との葛藤を解決して行く「源氏物語」や、町人と金銭との葛藤に抵抗して行く西鶴集に不朽の文学価値を見出した。そのように**ベスタロッチ**にしる、吉田松陰にしる、**キリスト**にしる、釈迦にしる、教育の成功者は人生苦悩の最も大きいものに抵抗を感じ、之を解決し得た人々であつたことを思うのである。かくて教育学の本質的なものが人間性の教育であるならば、それは又環境への抵

抗の教育であるとも云い得るであろう。

第一節 従来 of 教育学と環境

従来 of 教育学はとかく教育課程 of 教育であるとも云えよう。たとえ心理主義的に知的偏重 of 教育から分別され、人間の生きる力(生命力)としての教育にあつたとしても、生活即教育として教育課程を論ずるものであるとも云えよう。教育社会学としても集団社会と教育であり、地域社会構造と教育を論ずるものであると云える。民主主義と教育も生れ、地域社会学校も生れる。何んとううても原理的場になると素質と環境の問題が大きい。そして素質は社会から離れ、睡眠時も静思黙想のときも、寒暖乾湿への対処のときも、貧困 of 生活も、病苦 of 生活も、環境から大きい影響を受ける。それは生物が如何に環境に対して突然変異を起し、遺伝し、淘汰され、そして進化し、順応することにより、教育対象となる生命を持続するのである。かの**デューウィー**の云うように「生は環境に働きかけることにより自己を甦生する道程である」とは、肉体的そして精神的甦生とを勿論意味する。社会は教育によつて存続され、生かされるのも、環境に働きかけることを社会的に行動させることに由来する。社会と一体になつて生きることは環境によく適応し、同化し、超克し、包越して行くことである。子供の躰にしても、知的情意的傾向の側よりも外部的即ち環境的行動の側において多く考えられる。従つて習慣的に良い刺戟が与えられる環境で、作法がよい子供になる。自発的趣味が性格に刻み込まれるにも、色彩と形態の美の調和の環境で身に着けられる。だから**デューウィー**は「吾々は直接に教育することは不可能である。教育は間接に環境によつて出来るのである」と云うている。社会とても将来の為に純化された行動の出来る学校を環境として育て、最良の場を選んでこそ、将来への教育の場ともなる。保導 of 教育は子供に刺戟を与えて反応を呼び起させ、次への準備を保導するのであるが、環境のみが正常 of 反応を呼び起す刺戟を提供するものである。勿論社会的環境がその大部分 of 役をするのであるが、貧困とか酷寒酷暑も天災も亦環境としてこの役をする。僻地は自然 of 風土と山水翠明と花鳥の乱舞が環境であり、夜明けと共に咲く花を見る環境も与えられる。**デューウィー**の云う「子供を尊重せよ。しかしあまりに親しくなる勿れ。子供の孤独 of 域を侵す勿れ。」とは子供の環境を生かす為でもある。真の人間生活 of 環境とする民主主義社会に反応し順応する前に、自然と物との環境にあつて本性的な活動と本能と習慣とを要求するのが子供である。心性 of 社会化は善良な市民となることであるが、それは美術 of 鑑賞とか宗教への信仰とかを環境とすることで教育される。自由と解放とを要望して立つた**ビューリタニズム**は宗教的直観により人間の靈性を開発する環境で養われた。そして社会集団 of 存続のため必要な生き方を合理化するには民主主義的 environment を造ることだとされたのだ。それには行為に描かれる人間の象徴を自からの象徴とし、それを眺めて理想線への距離を反省し、これによつて自己を知ることである。そして修養することは他人の気持になつて受け入れることであり、愛情が意志や理知以上であつてこそ個人を人類性への発展に迄教育する環境が必要であるのだ。性格心理学にあつても個人の**パーソナリティ**の問題は、その社会や文化をぬきにして充分解明し得ない。それと同時にまた**パーソナリティ**因子の明かにされたもので双生児の場合一卵性と二卵性とを別々に育てられた同朋一緒に育てられてはいるが血縁関係のない子供などを客観的に測定しそれを因子分析して主要な源泉 of 特性に関する「遺伝対環境」の比を明らかにすることにありとされる。此ことから見ても環境 of 重大因子であることがわかる。又青年 of 不安や恐怖は試験 of 時期に急に強くなつており、保護的な**エルグ**は父親 of 病気が重い時に高まるのも環境 of 影響である。更に学習理論家 of 区別によれば、「統合学習」は葛藤 of 解決という大きい問題を含んでおり、それは葛藤を生ずるような環境がこれを招来せしめるのである。それだから**デューウィー**も人間活動を環境へ順応させるものは生命に根底を与え、そして更に

環境を人間活動に適応させる習慣を養うことで生命は発展するのだとも述べているのである。

第二節 環境の類別と教育科学

第一 自然環境 気候に寒暖乾湿風雪あるべく、また春夏秋冬中に晴雨あり、ことごとく精神及び肉体上の生命力に影響する。暑熱烈しく湿気多い時の人間作業能率の問題は、生命力を弱体化して、やがて平均寿命にも影響するであろう。山川風物また自然環境の偉大な人間教育者であることは、宗教人や思想家のよく高峯に独座して冥想し、大海の陽日を迎えて黙禱し、原始林をさまようて静思する例でもわかる。低湿地にあり四時雨雲の多い環境にあつては人間作業率を著るしく低弱させ、高度の晴天白日の多い地にあつては生命力も強化されることは寿命の延長さるることでもわかる。

第二 個人環境 人間個人の顔が同一でない如く、環境は異つている。生涯貧困で暮すもの、妻子を失い孤独で暮すものの精神生命力は、絶えざる鍛練によつて人間作業能率は上るであろう。暖衣飽食一日も物質に不自由なく身辺常に豊かな人情に生活するものの生命力は弱体化されるであろう。

第三 生命環境 遺伝形質で与えられた環境は精神薄弱児の場から天才的才能の優れたものに至る相違がある。癌素質の遺伝は発病性物質の微量によつて生命を短縮する。また胎内環境、即ち受精卵の子宮内での発育時の環境条件で畸形児も生れる。かの避妊法として使用さるる薬品の殺精作用に伴う胎児への影響を初めとして、母体麻酔や**ショック**や酸素欠乏が母体への影響と同時に胎児に及ぶのである。特に最近放射線による畸形児の出生やX線の母体への影響が胎児の畸形を生む事などが証明された。さらに精神的面にあつても亦遺伝因子である素質が胎内環境によつて変容さるることも知られている。例えば発作に対する感受性にあつて、受精後の卵子を発作の起し難い母体を宿主とするときに自身の発生的血統よりも低く、そしてまた子宮のなかで彼らが発育した宿主の母親の感受性よりは高くなる。かくて情動性にあつてもまた探索衝動でも動物で実験された。また動脈硬化症の早起罹病者は多数の子孫に罹病率を高めて精神的、肉体的労働に堪え得ざる生命力の弱体化を誘うものである。

第四 家族環境 兄弟姉妹の多い場合幼児の嫉妬心の養成に初まり、男女によりて教育に差異あるべく、情操と理智の発育に於いて異なることを考えねばならない。大都市に住む家族が高い文化の下での教育は、男性の粗暴性をたわめ女性化するべく、女性はより理智的となつて男性に近づくであろう。より男性らしき男性と、より女性らしき女性との結婚によつて生める次代は、より生命力が強大なものとなるであろう。

第五 社会環境 社会を造つた個人は個人の性格を変異し、犠牲となつて社会に国家に忠誠となるであろう。

第三節 肉体的及び心理的行動上の素質変容は胎教に始る

胎教とは受精卵の子宮内での発育中に於ける環境によつて教育の場を展開することにある。即ち胎内環境での素質を変容することにより、よりよい教育的場を与えることである。最近胎生環境の医学的研究は避妊法として醋酸**フェニール**水銀を使用し、その殺精子作用に伴う原形質毒としても作用する胎児及び母体への影響に就いて研究されるようになった。若し高等動物の妊娠早期に色素、鉛塩注射又低圧処理すると、胚に多数の中枢神経形成異常に基ずく畸形の成立が認められた。又母親が妊娠中低圧で胎児の脳出血に伴う脳圧迫変成も見られ、同様に酸素欠乏で異常形成が起ることも知られた。更に母体麻酔**ショック**或いは子宮破裂で胎児の血行障害母体貧血が証明された。母親

が航空旅行の影響で**モロコ**人症を生み、5000尺高地にあつた母親は異常児を生んだ。又燃料瓦斯中毒では中枢神経異常が生まれ、X線により家兎の胎児の眼に**ロセツト**形成、四肢異常などの畸形児が、流産に至るまでの間に生むことが知られた。母親が癌にかかつたとき妊娠していれば畸形を生み、放射線では脳**ヘルニヤ**も脊髄屈曲も眼異常も証明された。されば妊娠中の母親の態度が大きく肉体系のみならず、精神面にも影響を胎児に与える。特に心理上の素質変容をも見られる。

現代の心理学者**カーミカエル**は人間の約90%が生来的即ち生れながらのもので70%は習得的だと云い、**モルガン**は鼠の場合、食物貯蔵の行動は何の訓練もなしに自発的におこすものだから本能的だと云う。然し動物で本能的だと分類する行動形態について実際に知る処は甚だ貧弱だと云われる。鼠の巣づくり、仔を清め、巣へつれ戻す行動。また仔をうばわれた母鼠の落着かぬ右往左往また鳩の帰巢の行動。また発情期の雌鼠の行動や雄鼠の性行動。また暗がりて育つた鼠の視覚行動。また鶇の人工と真物の卵に対する反応等も挙げられている。何れも経験なしに行われるものであり、学習によらぬから遺伝によるとも考えられる。次に遺伝因子を述べる。

血統の異なる二つを交配して雑種の持つ行動から選択的蕃殖が実験室で白鼠で行われる。即ち一般的な活動性や、迷路に於ける行動や、情動性や、攻撃性の水準を変換することが出来る。生来的な血統の差による温度の好みも、探索の衝動なども、廿日鼠の選択蕃殖で変えられる。犬の神経的なものと鈍重的なものの変更に鶏の産卵系への変更に統制された交配蕃殖効果から行い得る。かの命とりの発作に対する感受性の高いものは、低いものとの交配で変更され、然も胎児期の環境を変容することでも可能である。即ち受精された卵を或血統の雌の輸卵管か子宮からとり出し、別の血統の雌の子宮の内に移殖するとき、正当に懐妊された場合に出産したもので見られる。発作の起しやすき雌を施主にし、起し難い雌を宿主として行う。発生的特性はかわらないが、命とり発作に対する感受性に自身の発生的血統より低く、そして子宮のなかで彼らが發育した宿主の母親の感受性よりも高くなるのである。このことは人間にも、それ以下の動物種族にも当てはまると**ゾンターグ**は指摘している。即ち動物の生来的な血統を高度に特徴づけるところの行動が、同系交配に帰されるだけでなく、それと共に出生期の環境の微れの変化にも依存するということである。それだから古来から説かだされた胎教なるものは学習の時を要したものでなくとも影響する。母の胎内で初め毎日1瓦以内の成長も後期には10瓦にも及ぶから、栄養が充分であることと共に、精神も静穏を乱し神経をいらだたせ清純を攪乱してはいけない。古来から胎教に留意すべきことが説かれるのも当然である。**ペスタロッチ**の新婚日記から「私が熱心に私の改善のために祈り、私の生涯の真実なる伴侶のために祈つても、最も卑しい楽しみ、動機があれば、すぐ再びそれに身をまかせようと準備する。最も小さい動機があれば、私の罪は止め度もなく従がおうと用意する。そして最大のことは、おお神よ！汝が險に私の愛の担保（胎児）を特に護りたまわぬときには、その過失が彼にまで影響を及ぼす危至るのである。わが神よ……われを助けたまえ」と。新婦の日常生活は妊娠中次のようであつた。

「……私は身体に果実を、いうにいはいはれぬ容易さで担つている。それについて神の親切を讚美しつくし得ぬ。この月日は私にとって新約全書の読誦、特に祈りの讚美歌が大好きになつてから好んで読む。又夫と私はあわれな争をしていた。おお神よ！力づけたまえ……如何に甚だしく私の精神が善きことに欠けているか、を汝はまことに知りたまう。……何卒平和を私の中にあらしめたまえ。私を助けたまえ。主よ！私が私の大切な子供をささげるときには……私をして満足せしめ給え。」との、心境であつた。

第四節 社会集団で**コァセルヴェート**教育

ソ聯生物化学者**オパーリン**は云う。「今日まで化学に於ける組成成分独自の性質は化合物に於いて

消滅するが、混合物に於いて消滅しない、と見なされていたことは古い……混合物は実際新しい化学的化合物の性質をもつのである。」丁度 個性は集団社会にあつて個人の混合であつても消滅し、新しい社会人としての性格を持つからである。彼は混合物と化合物とがかように同一性にあつて、単なる混在でないことを次のように説明している。即ち混合物の中に於ける各組成分（個人に当る）の力の静電場と電磁場とが互に作用し、引力の新しい手段が生ずるのである。そのことは性質の異つた物質を混合する組成分に見られない新しい性質が出現することが、生物体の単位を為す細胞原形質に見られる。**エンゲル**が生命ある処何処にも、蛋白質が原形質中で酵素反応に関連していると述べた。生ける蛋白質として化合物全体に特別不安定で変異性を持つ原子団があつて化学反応を起す。そして原形質に新陳代謝や総ての生活現象が与えられる。**アミノ酸**の連鎖複合体である蛋白質は、残留化合価で更に結合して**コロイド**粒子を形成する。同時に両性電解質の酸基と塩基と両者を有するので、種々な有機物と多種多様な化学反応を起すため重合が容易である。残留化合価で親水**コロイド**を形成する高分子重合体となる。原形質中で蛋白質と磷脂質その他と混合物を造るとき、変つた性質が新たに生じて来る。**ファラデー**は混合物の組成分の力の静電場と電磁場とが互に作用し、引力が新しく生ずると述べた。**オパーリン**は原形質を構成する成分**コロイド**系のものとの相互関係は甚だ複雑であり、これを**コアセルヴェート**と称した。**コロイド**粒子の帯電変化で生じたこの状態は、消失や滴状や凝集や均一溶液と極りなく変化するのである。即ち蛋白質と脂肪と異つた分子の会合で、何かの鎖で互に繋がれているような関連に立つて、初めて生命ある細胞の原形質となるのである。それで蛋白質と脂肪のみの性質で説明が出来ないのである。

国家集団の要求する教育は、人は生活に役立つものを学び、之と緊密な関係を保つことである。同時に大都会の交通秩序に至るまで現存在を自得することである。人々は人格を養わんとし有用性を考え、一方自然性の嗜好に従順ならんとする。一面人は理念に満されて、存在の距離や階級を造り、人との軋轢を避けなくてはならない。そして自らの責任に於いて共存生活をしなくてはならない。特に国家は将来之を担うべく成長する青少年を教育するのである。現代のような落着きなき世界にあつて、教育学的努力により理念の統一をもつて自己自身の価値を高むることを青年に期待する。民主的と云うても、それは児童さえ既に学校の規則に容喙することなき厳格さを以て生育することを排除しない。そして国家は教育を自由ならしめ、集団秩序を得て国家の目的に適う平和な教育を要求する。それに厳格な学習と練習とで、精神的含蓄とそれによる信念とを創造させるように導くことである。

第五節 家族内で男女両性の教育

男女両性の対立から民族生命力が保存強化されている。人生の舞台の芸術も文学も哲学も両者の愛を常に問題にしている。恋愛から高次の感情に進み、理想が生まれ、世界観にも到達する。人間の性（男女）は生命の発生であり、原始的現象であり、進化の段階である。男女協力により遺伝的欠陥を互に相補い合い、変異により民族の中に多様性を生じさせ新しい形質をもたらす。かくて民族の保存がいとなまれる。若し男女の対立を減少させ、相似的ならしめることになれば民族の滅亡をも招来する。何故なら男女両性間の対立とは、男はより男らしく女はより女らしさを保持させることであり、それによつて民族保存は永久性が与えられるからである。されば男女それぞれに異つた教育を施さねばならぬのであるが、勿論量的差等でなく質的に分岐した特異性があるべきである。然し、このことは必ずしも男女共学を否定するものではない。

家族生活にあつて男女教育に特別な考慮を払うにあらざる限り、都会文化の進める所では男性は女性らしく、女性は男性らしくなつて対立を失う傾向がある。即ち都会文化は女性を理智的に進歩

させ男性に近づけ、逆に男性の勇猛性を緩和し、情操を増加して、女性に近づかしめる傾向がある。これを防止するような教育がなされねばならない。何故なら生命力が強靱であり、繁殖力生活力共に旺盛で、精神も気力滲刺とし、自己抑制の強い意志と決断を有する次代を生むには、男女間の矛盾対立性の大きいもの間の結婚でなくては達成されないからである。遠隔血統の結婚は生命力の強い次代を生むが、同系のも即ち近親結婚では才能に優れても生命力の弱化したものしか出来ない。近親結婚では流産死産が多く繁殖力が弱化する。同時に精神的**エネルギー**は低下するから、勇気や忍耐や性格の強さも減退した次代を生むことになるのである。わが国の現在精神病者や精神薄弱児の多いのは近親結婚によるものであるとされる。即ち両親の結婚が封建的な家族主義に傾き近親結婚が欧米諸国の十倍にもあることに由来する。即ち1936年東京都で近親結婚は4.7~4.8%であるに比し、1926年の仏0.6独0.2英0.2%であることでも明かである。かくてたとえば愛知・香川県のように精神薄弱児が人口の1.7~1.9%にも達するのである。

第六節 自然環境光線・温度・乾濕への教育

光線に対して日本人が関心の低いのは光線の豊富である南方に発生した民族である為でもあろうか。之に反し、特に北欧の**スカンジナビヤ**に育つ民族は一日の教時間を光線を取入れる。その光線は幾万年も光合成による太陽エネルギーの資源であつて、生命の素材である蛋白質・脂肪・糖類を植物体で作つた。その有機物の10瓦の炭素から約100**キロカロリー**が放出されて生命を保つように離れた炭素は水素を酸素に与えて水を合成する場合はわれわれの体内の呼吸作用でも知れる。反対に水素原子を酸素原子から炭素へと不安定な形へ移すのが植物葉緑素に吸収された光量子、即ち一個づつの光の原子の**エネルギー**によるのである。前者が酸化、後者が還元で、酸化還元反応が生活**エネルギー**の根源である。光の量子エネルギーは光の波長で変り、赤色光は吸収原子の1瓦原子当り約40**キロカロリー**の量子**エネルギー**だが、紫外線のように波長が減少すればするほど量子**エネルギー**は増加する。だから海拔の高い紫外線に富んだ土地に生活する環境を持つた人々の生命が延長されるのは、それを利用するからである。皮膚色素が光線で濃厚になるほど酸化が高められ、また**ビタミンD**は**プロビタミン**から体内で合成される如きである。皮膚を赤くして血行を増進することは体内酸化力を高め、物質分解の代謝を増進して食欲を旺盛にし同化吸収させる。また遺伝子なる**デオキシ核酸**の異種なる**リボス核酸**による蛋白質の合成作用も亦酸化還元反応によるが、体分泌腺細胞の核仁中にあつて作用し、生命力の増強に役立つのであろう。紫外線の多い冬季節や、1日中にあつては早朝の光線を利用して、生命力を増強する教育が必要であらう。

宇野氏の研究(1951)によれば、日本アルプス穂高嶽山頂近くの標高約3000**メートル**に於いては、大気圧約350mmHg酸素分圧低下し温度摂氏10度内外であつた。二十日鼠を長期間飼育した後、体内諸機関中の蛋白質合成作用ある核酸、特に**リボ核酸**量を試験測定した。最も顕著なのは肝臓に於ける**リボ核酸**の著るしき増大である。その為に**デオキシ核酸**との比率は上昇している。即ち細胞数に比例すべき**デオキシ核酸**の増加なくして蛋白質合成の**リボ核酸**の著しい増加である。このことは**アトウェル**等の紫外線による肝細胞組織変化と一致する。また造血技能のある脾臓に於いて**リボ核酸**量は増加するが、**デオキシ核酸**は減少する。このことは酸素分圧低下で造血組織を刺戟し血中の赤血球を増加する技能を著しく増大することを示す。

温度の低い北欧や、夏尚涼しい北海道の低温は、生活中炭酸瓦斯吐出を増加し代謝を高めるが、之は**カロリー**の消耗高いからである。だから食欲は何時も旺盛であり、張り切つた生活力を発揮する。然し消費面が高いので栄養量は暖地の人に比較して少き傾向を与えられ、体格は矮少となる傾向がある。かかる場合、即ち質的に完全で量的に低い栄養で養われた場合、性器は發育を遅延し体

格矮少となること白鼠で実証される。従つてかかる場合、生命力は蓄積され、性欲は遅延され、寿命は暖地より延長すると云える。換言するに生命力の蓄積増強には至便の環境にあることを寒冷地の人々に教育すべきであると思う。

温暑湿潤の環境にありては、体内生産される熱量よりも外部に取り去られる熱量が少い。発汗も充分でなく、体温を発散させるに苦悩が多く、所謂**ストレス**により脳下垂体 A. C. T. H. の分泌も副

作業 良好	温度	115° F	110° F	97° F	95° F	90° F
	湿度	30%	40%	60%	70%	80%
作業 苦痛	温度	115° F	105° F	—	95° F	—
	湿度	40%	58%	—	80%	—

腎皮質**ホルモン**の**コルチゾン**の分泌も減少し、万病への抵抗性も薄らぐような衰弱の仕方となる。人体適温は 20°C を中心として上下 2.5°C 位で、仕事に耐えるのは 25~26°C を限度とするから、真夏に 34°C にも達するとき生命力は消

耗する。特に室内空気が汚れ炭酸瓦斯が 0.5% にも達するとき、人により**アレルギー**性疾患ともなる。湿気多く温度華氏 105°F を超えると頭痛倦怠を訴えるのは、病氣の原因を示すもので、生命力の消耗である。

第七節 家庭生活と時代精神との環境

生活環境の本能をも変えることは、野鶏では各一回の産卵か飼育鶏で産卵連続となり、巢籠りも亦同様に変えられることから分る。人間でも極寒地に生活する**エスキモー**族には冬の期間無月経になることがあると述べられている。生物的な進化と人工的栄養や保温や光線等の状況でかくも変化されるのである。然し精神面も亦大きい変化を本能の上にも与え得ることが知られている。ここに家庭生活環境と時代精神環境とを探究する必要があると云えよう。

成長中で大きい問題は性教育であろうが、性器や性生活の原理を教えるのみの問題でなく、全人教育による人間形成の一連としての性教育が必要であろう。児童の寝室の窓に東向きが絶好で、睡眠以外は明るい室であり、兄妹でも九才十才頃からは別にする必要もある。此頃から異性を知り十二才では肉体的な接触欲が出で、十六才頃から性交欲が現われると云われる。母親は寝室に入る前に甘過ぎるものや、刺戟の強い**チーズ**など食べさせないよう、寝床に入らば直ちに熟睡に陥るよう注意せねばならない。朝も眼が醒めたら直ちに寝床を飛び起きる習慣を付けさせる必要がある。又男子の自慰行為についての教育も、母親が下着や夜具やシャツに注意し、寝むるとき夜具の外に手を出すようにする。敷きふとんは厚く、掛けふとんは薄く軽いもの、寝衣は身体をしめつけたり固くて皮膚の刺戟のあるものをさける。読書指導をやつて性教育を上品な古典文学や恋愛文学に移し、肉体的なもの以上に精神的感情的な清純な恋愛にあることを知らしめる熱烈な愛情は精神を強く刺戟するから、神曲に書かれた人々の性欲は抑えれば抑える程求道の道に強く押し進んで行つた。彼の筋肉労働者の妻は毎日夫のサービスを要求し得るが、芸術家や哲学者の妻は自由にはならない。何故ならば性欲の猛烈な時、知的活動が妨げられるからである。**フロイド**も亦性的衝動が精神活動に非常に重大なものであると云う。精神病者や変質者に彼等の性欲を抑圧すると益々異状を呈するが、最も精神力の強い人々、即ち神経質でない型の人々、その禁欲によつて、一層強く意志の人になると**アレキシス・カレル**が述べている。だから神を呼ぶ宗教感情に入り、厳格な戒律で禁欲生活をも命ずる。この修業せずしにそれに到達するのは、肉体的訓練なしに競技者となるよりも難いのである。

思春期に立つた青年に清純な素朴な真率な情熱の若さを大きく歪めることがある。男は性器の發育を気にし、女子は胸部の發育で精神的に動揺する。一方社会的に関心高まり他人に興味をもち愛他的となり、恋愛への最初の運動となる。又社会的に経験へのさぐりに独創的に進み、危期にも遭

遇し、周囲を侮つたり、環境への反抗ともなる。**ブロンデル**の云うように人間精神、特に青年のものは何処で観察しても全集団（社会）の影響が浸み通っている。また**ブーゼマン**の云うように個人の素質を否定される迄にも環境によつて支配されるのである。だから現代精神的状況に就いて考えながら、性教育に望まねばならぬのである。**ヤスパンス**は青年時代を次のように述べている。「人間存在中で作業能力のある身体性としての生活力に、享樂の陳腐さに、労働と悦樂とを切り離すことが現存在からその持ちうべき重みを取り除き、公的なものは娛樂の材料となり、私的なものは興奮と疲労との交替や、つきる事なく流れて忘却に消えてゆく、新奇なものへの好奇心となるのであつて、然も長つづきするものではなく、一時の閑つぶしに過ぎぬ「即物主義」である。同時に共通な本能の際、限りない営みを展開する。即ちその本能を大量にして巨大なものとか、技術的な創造とか、莫大な人間集合とか、に対する熱狂において展開し、単独の個人個人の功績や成功や技倆の程度によつて湧き起る。世間一般のセンセーションに於いて展開し、性愛的なもの洗煉と野獸化とに展開し、賭や冒険に於いて、いや命がけの冒険において展開する。富籤におどろくほどの参加者があり、**クロスワード・パズル**が大いにもはやされる。こうして人格が参興することなしに情が即物的に満足することが作業機能を実際にし、その疲労と**リクリエーション**とか、規整されるのである。そして機能に解体することにおいて現存したその歴史的特殊性を剝奪され、遂には極端にも年齢が平均に揃えられることになる。（青少年も大人も同様に揃えられる。）そして青年は最も活潑な作業能力をそなえた性愛的な人生の愉快を味わうことのできる現存として人生一般の望ましい典型である。人間が機能としか見なされるところで（現代）人間は若くなければならない。彼がもはや若くないときには彼は青年らしい見せかけをするのであろう。おまけに年齢というものが、そもそも何の価値を持たないことになつてしまう。（年の老いた人も、壮年者も、青年の真似をする行為はかくして行われる。）単独者の生活は時間的にのみ経験され……生物学的に局面にもとづいて取消しがたく決定された組立てであることも思わぬ。それで人間が本来の意味ではもはや年齢を持たなくなつているとも云えると述べる。だから此頃長寿の問題が高く価値づけられる百年壮者とかな人生は四十才（即ち人の青年は四十才）だからとも云う。かかる時代風潮によく對抗せる勇氣ある性格の強靱な人間を養成するのが教育であらう。野獸性を排し、即物主義に陥らず人格を捨て機能となる現存だから性愛可能な年齢を忘れたものとなるのを僻けねばならぬ。経済特殊時代の宗教も教育もその隷屬者たるを排除すべきである。

そして**サンド・ブーフ**か**モンテニユー**をして行わしめている人生観を教育資料とも為すべきであらう。年齢を重ねるにつれて彼は變化したが年齢に応じたものであつた。趣味・読書好みであり少年の賑かさ不羈奔放さからはなれ前よりも澄した、また禁欲主義的の崇高さにも到達する。然し此崇高さも程なく低落し程よい穏な境地に落付くのであつた。経済上も初めに放蕩者で乱費したから友人の助力で暮した。第二期は金を握り大切に財布の口を締め過ぎた。数年後に馬鹿らしい緊縮生活から引き出して中庸の道に快い生活した。第三期には寛ろがせる人生に入り習慣に譲歩し結婚もし父にもなつて義務も果した。彼が年を老いて行くが何事にも年齢に応じて取り扱う。そして云う。「人生の若草を見、花を見、果実を見て来た。今や冬枯を見ているのが幸福だ。自然であるから。」

第八節 個人心身上の葛藤を日本に見る

われわれの肉体的生命を支障なく自然死に至らしめ、此間最も能率高い生活々動を持続せしむるために教育が必要である。そして日本人にはその環境から来る特殊なものがあるので、これを知ることによつて教育は容易に目的を達成し得るであらう。

第一にわが国現在の精神病者や精神薄弱児が、之を生んだ両親の封建主義的家族主義から近親結婚に由来している。その数は欧米諸国のものの約十倍以上に達している。1936年東京都の近親結婚数は全結婚数の4.7~4.8%にありて、欧米の1924年0.6% (仏) 0.2% (独) 0.2% (英) に比し20倍にも当る。愛知香川両県下の精神薄弱児は全人口の1.7~1.9%、その山村では0.5%、秋田山本藤里の山村では4.0%にある。然も藤里山村1600戸の中大半が村岡、市川、菊地、佐々木の四姓に限られていることでも近親結婚の多いことがわかる。又精神薄弱児は小学校三年生で知能発育四才の子に同じであるものもあると云う、愛知香川では精神分裂症も多く、人口の0.7~0.8%、山村では特に多く実に3.2%の高率にも達している。此等には当然少年犯罪者の数を増す。

第二に生命力の強弱は死亡率でわかるが、男女の差異は40~50才では見られぬが、70~79才では男子90.5%に対し女子67.5%にあることが昭和25年の人口統計に示されている。脳溢血や結核が最高で、癌が之に次ぐ高率である。脳溢血は農村婦人に最も多く45~50才にあらわれ、癌腫は男子に多く65才以上に多い。結婚年令は夫の25~29才、妻の20~24才多く、昭和12年頃より最近に至るにつれ若くなつてはいるが、離婚の多いのは夫25~39才時代にある。都市及び農村労働者の食費は収入の50%で被服費は都市で35%、農村で20%で老齢程後者の割合が増加する。出産は文明国中で最も高いのは日本であつた。そして初婚で旺盛で、出産間隔が約二ケ年で25才以下で5人を生むものが多い時があつた。そして人口増加率は23年の21.8%から5ケ年後28年に15.9%の急激な減少となつたのは、産児制限によると云える。子供の最も多いのは農家で商工業者が之に次ぎ、俸給生活者は最も少ないが、一般に収入の多い家庭に却つて少く、夫婦の教育年限の長い者程出生児数を減ずる。産児制限は30~34才の婦人に多く、子供の4人以上の人に最も多い。職業別では俸給生活者に多く、教育の高いもの産児制限者が多い。

出生制限の本来の目的は「優生保護法」の指す処にあるが、人工妊娠中絶が濫用され、昭和25年以後年々80~100万にも増加していることは戒めねばならない。然も教育程度の高いもの程その率の高いことは欧米の文化国の産児制限でも同一傾向である。産児制限による計画出産によつて飲食費も被服費も教育費も減少するが、特に春三月家族の最も楽しみを取る時に経済上の余裕を生ずる。之に住居費・光熱費を加えて全支出の割に当るならば、医療費・学校外教養費をも子供と家庭に豊かならしめ、**リクリエーション**にも割愛され、やがて支出の15%に短縮も可能となるであろう。更に計画出産によつて質的にも量的にも優れた生命力の強靱なる次代を生むことは必致であり、それには受精の度を減少し節制により稀れに巨大な精子を供給することになる。それは一精子の受精が数千精子の崩壊犠牲によつて次代の生命力即ち増殖生長に協力せらるるからである。即ち精子の崩壊によつて**リボ核酸**から生じた蛋白質合成酵素が強力にこの役目を為すのである。従つてこの協力の甚大なる場合、生命力の強靱な時代を生むのである。生命力の強靱は肉体のみでなく、心的にも**エネルギー**大で意志強固で勇氣あり堅忍不拔、逆境にありて自己統勢力に富み、冷静平和裡に事件を処理するものである。また母性の栄養回復に最も適当な時節を出産期に選ぶ必要がある。春の新緑を含む萌芽の中には**リボ核酸**含量に富むから、特別優れた栄養価がある。尊い野草葉の中には**ビタミン**多く、水産物にも畜産物にも春草有効成分を含み、幼鶏も若魚も特段の栄養を母体に供給する。

精神生活も家庭において愛をより処とし、利己的ならず、家族全体の為めに働く**ヘーゲル**が述べた。原始的道徳性も愛と信頼から孝順の心として生れた。夫婦は優生学的に勝れた立場で恋愛結合の下に次代を生み、最善の教育と訓練の道に協力する。家庭の中心である婦人は天職と天分からの外部活動との調和により営み、清らかな温い母性的精神を発揮すべきである。即ち寛容にして慈悲あり、愛は妬まず、愛に誇らず、驕らず、非難を行わず、己の利を求めて憤らず、人の悪を念わ

ず、不義を喜ばずして真理の喜ぶ処を喜び、凡そ事信じ凡そ事望み凡そ事耐えるなりの聖書の句は、和合を表示するのに引用される。家庭生活上に神の權威を仰ぐことは、わが国でも新家庭を持つた夫婦は神殿を拝し、仏壇に詣でる事でもわかる。

第九節 個人肉体葛藤への抵抗と鍛練

起居の訓練は肉体と精神との鍛練へよき習慣を与える。日曜祭日も平日と変りなき早起きと、入学試験にも夜深く勉強せず済ませる習慣を養う。規則的な生活は一生を通じて肉体を壮健にして、精神に物に動ぜぬ平静さを与える。雨の日も、晴れの日も、欠くことなき屋外での一定時間の運動は一生涯欠いてはならない。若き時代は之によつて体内諸機関に澁刺たる生気を与えるために、老いては食欲と睡眠とを充分に取るために、努力実行することが望ましい。年令に応じて、応分以上の山登、スポーツに努力し、肉体を鍛練し置くならば、病氣の際にも、不眠つづく緊急事件の解決に没頭する場合にも、肉体がよく堪え得るように余力を貯えることが出来る。

冷えびえとした夜長の秋は読書の時である、と昔からされるのは、静であると同時に頭を冷したような清涼さを味いつつ、読みつつ考えることに適するからであろう。頭に冷水をあびて考え直すのも、な最も多く血液の循環を必要とし、多量の酸素を運ばねばならぬ脳織細血管の収縮したものを膨脹する事で、技能が達成されるからである。試験勉強や深き思考で仕事をするとき、空腹で胃腸に血液を集めない時を必要とするのも、頭脳に血液を集める為であろう。腹内のものを排便して、あとの頭脳の働きを強化されるのも亦同一である。昔から正しい判定をするに、丹田に力を入れると良い、健康を保つにも役立つとされるのも、頭に熱をもたせぬにある。暑熱では反対に頭脳は朦朧ともなり、精神労働には特に苦しむことでもわかる。

寒暑に対処する事が極めて大切な教育でもあろう。夏季睡眠で温つた寝起きに冷水を浴び、半時間のかげ足をするもよい。山登りの朝の高原の冷氣にふれるのも、冬季戸外にスキーをかけるのも、共に爽快な気分を味いつつ身体内新陳代謝を高め、血行を増進するであろう。かかる地に住居する人人の平均寿命が世界的に高いのも理由があろう。**スカンジナビヤ**半島の北極に近い地がそれである。寒冷の地は唯に頭脳の養生に好適であるのみでなく、身体の平静なる生活に役立つ。人工冬眠は冷処で行われ、体温を低下し呼吸の炭酸瓦斯排出を少くするので、生活々動を低下して**エネルギー**消耗が滅殺されるのである。これに近い状況での頭脳を使う精神作業は、極めて能率的に行われることを忘れてならぬと思う。早朝の戸外の空気はかかる状況を与える場合に適するので、早起が日曜も祭日も平日と同様に必要なことがわかる。読書も、思慮も、構想を練るにも、難問解決にも役立つ時間が此時である。かくて頭脳即ち精神力の鍛練は早朝に寢床を蹴つて起るに始まると云えよう。特に若い時代のように体温も高く、この調節が容易に出来るときに清涼の冷氣が必要である。寒冷が皮膚を 17.4℃ 近くに低下するようになれば衣服による保温が必要となるので、36.8℃ に保持すべきである。

暑さに対しては食生活をも変えねばならぬ教育が必要であるのは、容易にそれは避け得られない為である。睡眠の不充分を補う為の午睡も必要であり、運動不足の**スポーツ**、山登、**ハイキング**等にも留意するのは勿論である。食生活は特に消化器を害すること多い夏特に**ビタミンB**を補給することに留意する。脂肪が欠乏せぬよう昔から**ドジョウ**や**コイ**や**ウナギ**等を摂取したようにバターを欠かさぬことも必要であろう。夏季汗を出すことで**エネルギー**消耗を甚しくすることに留意し、衣服が湿ることで体温の伝導が烈しくなるのであるから冷氣の急に襲う時には避けねばならぬ。従つて冷氣から寒くなるにつれて毛織物を多く使用することは、保温度の高いことを必要とするからである。夏時の白色衣料で吸収熱量の五割を減少することも出来るが、同時に通氣のよいものを使用

すべきである。衣服の温度が31~33°Cにあるのが湿度の中層、40~60%の時の体温の36.5~37.0°Cに保持に容易でありエネルギーを要すること少いからである。衣服は防暑防寒の役目にあるが、常に乾燥し清潔で空気の流通よいのが好条件とされている。独逸衛生局の調査で、都市の夏は一日3.2、冬は2.7、田舎町市では夏は4.6、冬は3.8、村落では夏9.0、冬は5.0時間の戸外生活である。それだから都市程住宅も日光が多く入り紫外線によつて殺菌力の上でも皮膚下に**ビタミンD**生成や新陳代謝を高め、且つ眼の衛生にも必要である。従つて家屋建坪の一倍半乃至二倍の敷地を要して草木繁る余地が必要であり、地下水も1.5メートル下にあり、換気も1人1時間50立方メートルを要する。室温の適度は標準18~19°Cとするが、虚弱児、病人、老人では21°C内外が適度とされる。寝室は温度が少し低いのが宜しく、暖さは掛け物で得られ、不燃質家屋なら必ず夜間も窓を空け置くことが必要である。特に暖房の室にあつては空気の交換が必要で、寝む時は頭寒足熱を根本とし汗をかかぬ程度で病老人以外は寝床の保温に避くべきである。

家庭生活環境に対する抵抗性の増加により生活阻害を防止するには身体の鍛練が最も必要である。**オパーリン**は生命の起源は蛋白質分子の動的安定系の性格を保つことが出来たのが生活をつづけ得て進化生長したとする。即ち外界状態と密接な関係を保つて物質代謝も変化を受ける。かく長寿を保つのも肉体的訓練の如何に左右されるのであり、このことは卓子による人と筋肉労働者とで後者の寿命八か年延ると英国の学者が述べる点でもわかる。生命力の強化も矛盾性対立の環境に立つて適応能力を盛り上げることにある。寒冷・温熱・光線に対する抵抗性も鍛練による時生活が増強される。スポーツの訓練によつて新記録を出し得る生活力の強化も亦適応力の發揮による。飽食で栄養を取る日を長く続けることは、生命力を逆に弱化する。だから質に劣ることなき僅小食か節食か絶食も時に行なうことで生命力が増強される。勿論内外の葛藤**ストレス**により内分泌は阻害されず、適応増強される程度のもとする事が必要である。創傷治癒力を高めるのも免疫力を高めるのも病細胞の発生を阻止するのも抗体の**グロブリン**が抗元ウイルスに対する適応力強化されるのは特殊原子団配列を持つことによる。心の個人的時間的意識の分裂があつて統一を欠くことに対し、総括し統合する鍛練で神経的に強くなる事である。絶えず変化する意識に対し分裂を避け経験と共に統合し人格の基礎とする。されば心的緊張力を高め抵抗と鍛練で生命力強化となる。

野鳥を捕えて籠に入れると心身内外の葛藤で脳下垂体及び副腎皮質ホルモンの分泌は阻止され健康を損うのである。即ち精神的にも、肉体的にも、疾病に対する抵抗性を失い、神経痛にも伝染病にも罹り易くなるのである。その傾向は家に飼育されたものと自然の野に育つたものとの間に差があることから記憶すべきである。芸術鑑賞が文化の進むに伴い旺盛になるのは、人生へ自然を取り入るる一手段でもあるとも云える。印度宗教の根本義は実在の根底にある精神的原理の神であつて宇宙の大精神である。実在として神その者は精神と自然との合一したものである。かく全知全能の神なるものによつて我々の道徳が維持されていると考えた方がよい。

意志が強固で勇気があり、堅忍不拔とは心的**エネルギー**の發揮し得たときで、精神的緊張力が高まつて生命が増強された時である。それは逆境にあつて自己制御の下に冷静に事件を処理する事でもある。**ジャネー**は最も高級な行動とは、人間が現実の環境に対して行動的に適応する場合の意志や注意などの、心的機能だと云う。単に**エネルギー**を総合し、動向を統一し、行動に実現するのみでなく、反対する凡ての衝動を抑圧し、自己の行動をよく制御する。心的葛藤は此制御力の減耗した時である。この生命力が生活環境への適応力でその人の性格を為す身体的要素と共に、感情も希望も思想も共に他の心的要素をも包含した現実行動となるのである。哲学的には彼が愛し得る能力であり、之による強い意慾が燃えるのである。自己を超越する愛は自己を完成する傾向を取るのである。即ち自我の衝動的因子と制御因子との精算により精神**エネルギー**の総合と制御とを示すもの

で、生命力の強靱なことに、制御し抑制し節度を保つ意志であると哲学者は述べている。これは**シヨウベンハウエル**の生命意志でもある。

日本人の生命力強化因子として自然愛好がある。平安朝時代の枕の草紙や徒然草の日常生活に自然が折込れている。**モラエス**は、日本の美術は自然を愛し、変化を好んで、日を送り、年を越し、世紀を送つて、枝から枝へ、花から花へと飛び移る……疲れ知らぬ胡蝶のようだと云う。宗教芸術の偉大な寺院で、その傍に庭園がなく、森がなく、緑に囲まれないものは一つもないとほめている。衣類にも女性服の裾模様に山水草木花鳥あり、男性のバッジや紋服に、菊あり桐あり柏葉瓢箪がある。ネクタイに自然模様あり、女子の髪を飾るに胡蝶形のリボンがある。食生活にも山海珍味を列べるが、刺身魚肉のつまみに水草を置き、緑の人蔘葉を列べる。吸物に月を装う卵子と松葉を装うた細葱を散らす。人蔘を梅花形に切り大根に花形を与えて酢の物とする。さらに桜の花の漬物や菊の花の蔭ぼしが食膳に上る。祝典時の菓子に鯛あり、花あり、栗実の饅頭あり、芋に似たものもある。住宅に至つても日本建築は樹木の花咲く枝に遮断されて、決して地上から逃れて理想に立とうとしないことが造型的に表われる。欧米に見る天を突裂く高さに円柱あり、塔あり、地上から逃れているのとは甚だ異なる。かの純日本式庭園の桂離宮を訪問するならば日本庭に囲まれ自然に融け込んだ住宅が見られる。そして座敷からの眺は、遠く山村を見るようである。神社でも寺でも、荘厳にして巨大な構造であるよりも、参詣に来る人々に風景を眺めて惚々たらしめ、同時に自然を拝むのである。彼の苔寺なる西方寺などはその代表的なものであろう。**ペーコン**の「心を物に屈せしめるのが科学で物を心に従属せしむるのが芸術である」との言葉の如く芸術を生活に取り入れることが大切である。高浜虚子の人世観に、「自然とは社会的なものすべてを含めてあらゆるものを動かしている何か根源的な力である。そして人間の生命に花が咲き、木の葉が散る自然の動き、天体の運行と同じもので、宇宙現象と共に生れ共に死んで行く……」と述べる。貝原益軒の人生訓に「名所の地、山水の美しき佳境にのぞめば良心を感じなおい、鄙吝をあらいすすぐ助となれり」…「山水月花の主となりて、人に乞い求むるに及ばず……此樂貧賤にしても得やすく後のわざわざいなし」とも述べた。

世界の文化が進むにつれて、社会的分業が拡充され、勤労生活はつづく。そして宗教的に倫理的に日いづれば業を取りその勤労は夕に至るとするのは聖化であり、奉仕を意味する。独立自主の人間として暮せる為に労働が生れ、目的の達成に最善の努力をするのが生の持続でもある。かくて主観的に働く人の生の光明化となり、美化ともなつて、真価をあらわす。本来平和的に行われねばならぬ労働が現実の生存のため闘争を生じ、非人間的になるのは悲しい。然し之には熟慮も冥想もあり、自己を離れて眺め「汝自身を知る」事である。

平和には貧困非運の中に友と二人携えゆきて塩を一緒に食べるのだ、と説かれる。江戸時代貧困を意にとめぬ世界的芸術家北斎がある。亀沢町馬場の住居を書いたものに図上炬燵を背にし、布団を肩にかけ、筆を採り、描き居るは北斎翁である。その傍に座し翁の描くをうかがい居るは娘お栄である。室内のさまはいずれも荒れ果てて翁が傍らの杉戸には三浦への手紙の草稿を張り、お栄の傍の柱には蜜柑箱を少しく高く釘づけになして、中に日蓮像を安置している。火鉢の傍には炭俵や、土産物の桜餅の籠や、酢の竹の皮など取り散し、物置と掃溜と一緒なのである。北斎の生活振りはかくの如くであることから、貧困に安んじていたことがわかる。

哲学者**シヨウベンルウエル**も自分の要求を出来るだけ低くすることが大きな不幸から逃れる最も確実な道であると教えている。**シュエストフ**が悲劇の哲学の中に**ドストエフスキー**に教えられて次のように云う。最も苛まれ最も卑賤な人もやはり人間であり汝の兄弟だということが判る。——と。**モンテニュー**は「随想録」の中に、徳とは心身両面の困難を克服する努力であり、……不眠断食や様々

な苦悩ありそれこそは甘美な香味を徳に加えるものである。と更に**キェルケゴール**は「死にいたる病」で次の如く教えている。病氣、悲惨、困難、不運、病氣、嘆き、憂恨と云つたものに「死にいたる病」でない。「絶望」こそは死に至る病である。これを治療する唯一の方法は熱烈なる信仰を持つことである。

デュアメルは、その小説の中で次のように教えている。「自分のルンペン生活は晩遅く街角の瓦斯燈の下で雨に打たれながら来ぬ人を待つのに似ている。希望も空しいことを知りながら希望あるかのように職を見付けようとあせるのです。零落の最初の杯を口にあてていやおうなしに飲まねばならぬ自分である。そして激しい衝動を受け、自分は捨てられた人間、真の貧乏人だと意識しつつ職を漁り歩くのです。或日静かな街で自分は手車を挽いている小僧を見ました。車には重そうな荷物を積んでいる。小僧はまるで貨物船を引いている蛙のような恰好をしていました。前屈みになつて両肩に喰い込んである曳き綱にその瘦せた全身の重みをかけていました。一方の手で片方の棍棒を握りもう一方の手で何を持つていたとお思ひですか。本を持つていたんです。車を曳きながら貪るように本を読んでいたんです。それを見た半日自分は羨ましいような恥かしいような暗い気持ちに悩まされました。その小僧の生活は空つぽな平凡な自分の生活に較べて充実した豊かな望ましいものに思われました」と。そして**デュアメル**が青年時代彼の貧困も最悪の貧困から新しい村の一つに僧院を造つた経験をもつたのである。僧院は友情以外に規則も何もない集りであり、そして細細と喰うための手仕事をやつた。16世紀以来芸術家は題材として貧困を取り扱い、その美しさを表現している。浮浪人の群や、ジブシー女や、**ハーレム**の悪性婆や、土を耕す人や工場労働者や、乞食の絵も皆赤裸々な姿を画いたものである。

わが国学園の中に二宮金次郎の薪を背にして読書に余念の無い姿を見る。これが孤児であり河岸の空地に菜畑と水田を造り小を積んで大を為す事の真理を抱握した人でもある。人間の尊厳さこそは特有な魂の主であり、善の人、知恵ある人であることだとする。さればいかなる運命にも見ごとくに堪え忍び得る魂である。勇敢とは貧困と云う自己の悪徳から出たものでないならば恐れぬことである。

かくて現実の環境に対する心的機能の鍛練が必要となる。それは常に強い精神力を持ち、力と緊張とを備え、意志的で、勇敢で、明晰な行動を為し得ることである。それは唯に心的**エネルギー**を総合し、動向を統一して行動するのみでなく、反対するあらゆる衝動に抵抗を感じ、これを抑圧し、自己の行動をよく制御することである。されば自我の衝動に抵抗し、制御を全うして生命力の強韌性を示した節度ある意志が常に張り切つていることであると云えよう。